
Xmasの贈り物

紅玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Xmasの贈り物

【Zコード】

Z3964D

【作者名】

紅玉

【あらすじ】

クリスマス時期にやって来た変なヤツ。ふてぶてしくて、マイペース。一言で言えば、傍若無人！！ヤツの目的は、誰かの願いを叶える事。果たして、願いは叶えられるのか！？

垣沼 明（かきぬま めい）編1

雪がはらはらと舞始めていた。明はダウンジャケットに手を入れ、道を歩いていた。

寒さで鼻が少し赤くなっていた。

「雪か…」

灰色の空を見上げた。白い雪が空から降つてくる。

「おい！ そこの赤つ鼻」

明は誰かの声を聞き取った。辺りを見回す。誰もいない公園前。

「ん？」

明は、砂場の近くにある雪だるみを見つけた。
おかしい。

今、雪は降り始めたばかり。まだ積もってもない。なのに、何故ここに雪だるま？

明はその雪だるまに近づいた。下から上まで眺める。雪ができるみたいだ。

「いたずら？」

「何がいたずらなんだ？」

また声がした。どうやらちっつきの声は、聞き間違えではないらしい。

「誰？ 何処にいるの？」

再び辺りを見回すが、公園にいるのは、自分との雪だるまだけ。他には誰もいない。

「ここだよ。ここ」

明は気づいた。この声は、すぐ近くだ。

そう、それは自分の目の前からのようだ。でも、目の前は人ではなく、雪だるまだ。頭に一瞬、非現実的な事が浮かんだ。

「まさか…ね」

雪だるまを見て、笑つた。

「お前、鈍感だな」

声がした。やすがに段々、氣味が悪くなつてきた。

「おーい」

雪だるまの手が拳がり、左右に揺れた。明はさあよつとして、後ずさる。

「やつと氣付いたか？」

雪だるまは、手を振り続けている。

「しゃ、しゃべつてる……。」

明の顔は、蒼白となつた。

「そう、見た田は雪だるまだが、オレはしゃべる。オレは、スノーマン。よろしくな」

雪だるまは、意気揚々としゃべつてゐる。不氣味だ。

「な、な、な」

明は何も言えず、口をパクパクさせている。

「オレは、お前の願いを叶えてやる。願い事を語つてみる。たいていの事なら、叶えてやるぞ」

雪だるまが願いを叶える? 雪だるまが...?

「普通、この時期つてサンタじゃない? 何で雪だるまなのよ」

震えながらも、明はツツ ロんだ。

「サンタなんてえのは、願いなんて叶えひやくれねえよ。夢とやら胸糞悪いもんを『えるだけ』」

あんたは、夢いつぱいの体していくるくせに夢がなき過ぎだよ。と、明は雪だるまの暴言にもツツ ロミを入れたかったが、何をされるかわからないので黙つていた。

「で、お前の願い事は?」

「...何でも叶えてくれるの?」

明は少し怖さを忘れ始め、興味を示し出した。

「たいてこの事はなつ」

「恋愛は?」

「恋愛?」

雪だるまは、明を見上げた。

上から下まで一度眺める。

ショートカットの髪、その髪形のせいにそつ見えるのか、少年のよ
うな顔立ち。

凹凸のない体にダウンジャケット、セーター、下は短パンにブーツ。
どいつも、子供くさく感じる。

スノーマンは、「ふつ」と笑った。

「確かにそんなんじや、モテなさそうだな」

「それ、どういう意味！？」と、明はムツとした。

「胸もねえし、ガキくせえし、まず女っぽくねえ。ってか、お前ホントに女か？」

明はスノーマン的を射たストレートな言葉に、自分の理性が切れる音が聞こえた。

「ガシ、ガシ！！」

明は何発もの蹴りをスノーマンに入れる。

「お、おい、やめろ！！体が崩れる」

スノーマンは悲鳴を上げる。

「ちや、ちやんと願い叶えてやつから、や、やめろ」

明は蹴るのをやめた。

スノーマンは急いで足跡がついた部分をなで、体を修復していた。「あー、怖かつた。体がなくなつたら、戻るもんも戻れなくなつちまつ」と、スノーマンはぶつくさと咳きながら、体を撫でている。「で、願いは、両想いになりたいんだろ。誰となりたいんだ？」「高校の先輩…」と、明は恥ずかしそうに答えた。

「はー？お前、高校生だったの？！中学生かと思つてたぜ！」

再び明は、足を振り上げようとした。

「わわわ…悪かった。謝るから！！」

慌ててスノーマンは、自分の非を認める。

「で、そいつの家は？」

「家？」

「知らないのか？」

明は首を横に振る。

「じゃあ、案内しろよ。そいつを見たいんだ」

明は田線を下に降りした。

「歩くの？」

白い真ん丸な体は、直接地面についている。

「歩くよ。何で行けってんだよ。そいつん家遠いのか？」

「このすぐ近く」

「じゃあ、平気じやん。何の心配してんだ？」

「足」と、明はスノーマンの体の下を指差した。

「ん？ ああ、あるぜ。うじやなきや、ここまで来れねえーもん」
スノーマンはそう言つと、歯を食こしばり、力み出した。すると、「ポン！」とこうこう音とともに赤い長靴の足が、片足ずつ飛び出してきた。

「ふう、今日も快調！！」

スノーマンは、爽やかに汗を拭つ。

「さあ、案内しや」

「う、うん」

明は公園を出て、せつて歩いていた道へと戻る。道沿いに並ぶ家の一つが、先輩の家なのだ。

しかし、後ろがどうも気になる。後ろをちらりとみる。

赤い長靴を履いた雪だるまが、自分の後に続いてテクテクと歩いている。

気持ち悪い。自分は、雪だるまの靈（そんなものに魂が宿つているのか？）にでもとり憑かれた気分だ。

テクテク…。

「まだか？」

「うん…」

テクテク…テクテク…。

「まだ？」

「もうちょっと」

「テクテク…テクテク…テクテク…」

「お前、歩くの鈍のくねえ？」

「もう、着くよ」

明は一軒の家の前で、足を止めた。

「ここか？」

「うん」と、明は家を眺めながら頷く。

「じゃあ、インター ホン押せ」

「え？」

明はスノーマンの突然の言葉に、振り向く。

「用もないのにできるわけないじゃない！先輩が出て来て何て言え
ばいいのよー！」

「それは何とでもなるだろ」

簡単な事のように言うスノーマンが、憎らしく。そして、この間抜
け面がとくに。

「あんたもう一回、蹴り入れようつか？」と、明はスノーマンを睨み
つける。

「胸もない、ガキくさい、その上、乱暴者ときちやあ、叶う願いも
叶わなそうだな」と、スノーマンは強気に出て来た。

「何であんたそんな……」

明は、「はっ」とした。ここは、先輩の家の前。だからこいつ…。
「オレが代わりにインターほん押してやるよ」と、スノーマンはテ
クテクインターほんの前へと移動する。

「だあーっ！……やめて！！」

明はスノーマンの体を掴み、急いでインターほんから引き離す。と、
同時に玄関の扉が開かれた。

「あれ？ 家に何か用ですか？」

見た目は、一言でいうと素朴。口調は穏和な印象を受ける。

「せ、先輩！？あ、あの」

明は思いがけない出来事に、ざきまぎする。

「いやあ～、先輩の家つてこじだつたんですね

「君は？」

「あ、こんな恰好じやわかんないつすよね。ただでさえ、同じ学校
つていうだけで先輩はオレの事知らないのに話しかけちやつてスイ
マセン」

スノーマンは馴れ馴れしく、ペラペラと話し続ける。

「冬なのに、こんなの着てて暑いっすよ。あーオレの事は、スノー

「マンツて呼んでください」と、スノーマンは枝の先に手袋をはめた手を差し出す。

「どうも」

男は怪しむ様子もなく、「こりと笑つて握手を交わした。

「こいつは、オレの友達です」と、スノーマンは明の背中を押した。

「あ、あの、垣沼明です」と、明は顔を赤らめ、男の顔を見る。

「よろしく」と、男は手を差し出し、明は俯きながらその手に応える。

「先輩、オレ達と友達になつてください……」

「いいよ」

スノーマンの突然の発言にも、男は快く受けた。

「やつたな明……」

スノーマンは「ドン」と、明の背中を叩いた。棒切れでできている手のくせに意外と力が強く、痛かつた。

「う、うん」

「あ、そういうえば先輩これからお出かけですよね。邪魔しちゃってスマセンね。それじゃあ、オレた達はこれでおいとまします」とスノーマンはこつと笑うと、明の手を引っ張り、そそくさとその場から去った。

「へ、嘘みたつい……先輩と友達になつちやつた」

明は、まだ少し赤い頬をおさえる。

「どんなもんよ！恋つーのは、強引さが大事よ。しかし、あいつアホそうな奴だつたな

「アホつて何よ……」

「だつてよ、よく知らない奴と簡単に友達になれんだぜ。絶対、騙されやすいタイプだな。まあ、実際にオレの正体騙せたけど」

「そこがいいのよ」と、明はポツと顔を赤らめる。

「ふーん。それよりもだ、何でお前、あいつと知り合いじゃねえーんだよ。友達からつて、チンタラやつてる程オレは暇じゃねえんだぞ」と、スノーマンは腕組みをしながら、横目で明を睨みつける。「そ、そんな事言われたつて！でも、何度か言葉を交わした事くらいならあるもん！！」

「あいつの頭の中にお前がいなきゃ意味ねえだろ！」

「うつ…」

明はスノーマンの鋭い指摘に、何も言えなかつた。

「まあ、でも急接近大作戦をこれから決行する！！」

「え？？」

明は、目をぱちくりさせた。

「オレに任せとけ」

スノーマンはニヤリと、不気味に笑つた。

作戦1

相手に自分を印象づける。

作戦2

クリスマスに手づくりのプレゼントを渡そー！

作戦3

「そこまで呟つねやおつー！」

「…何これ、安易な感じがするんだけど…」

明はスノーマンの作戦に呆れていた。

「うつせえなあ、チンタラしてんのは嫌いなんだよー…どうせなら、一気に自分のパッションを相手にぶつけて砕けちまえーってのがいいんだよ。あ、砕けちまつたらダメか。作戦1は出来たと思つて、とにかく、作戦2はやれよ。絶対、気持ち搖らぐぜ」

作戦1…ああ、あれだけ馴れ馴れしくして、突然友達になってくれつて印象に残るよね。でも、雪だるまのあんたの方が印象に残っている気がする…。

「それで、お前は何ができる?..」

「…」

明は顎に手を当て、思考を巡らせる。

「…」

明の眉間にシワが寄る。

「…」

「何もねえーんだな」

スノーマンは、苦笑いして首を捻る明を見る。

「じゃあ、マフラー作ろうぜ。オレ、教えてやれるし

「私、不器用なんだけど…」

「その様子を見ればわかるよ」と、スノーマンは苦い顔をしたまま言った。

そして、明は緑と白の毛糸と編み物用の針を買い、スノーマンの

いる公園へと戻つた。

「それじゃあ、簡単な編み方を教えてやるな。まずだなあ、いづこ
て…」

「…」

手袋と枝の手なのに、器用に一列編み込んでしまつた。

「わかつたな？ やつてみろ」

手本を見せたスノーマンは、明に途中まで編んだ毛糸を渡す。明は見よう見真似に、針を動かす。

「…？」

上手く出来ない。あんな雪だるまの手でもできるの？…。

「やことやこをかけ違えてんだ。そこを抜かしてると」と、スノーマンは間違えを指差し教える。

「え？」「いづこ、いづこ…」

明は、スノーマンに言われたところを確認しながら正していく。

「やづ、やづ。手つきはぶきつりょだけど、いい感じだぞ。やればできるんじやないか？」

乱暴な口調だけど、誉められると素直に嬉しい。

「それを何度も繰り返していけばいいんだ。簡単だろ？」

「うん」と、明はこくりと頷く。

「あのさ、スノーマンって、何で人の願い事を叶えてくれるの？」

「それはだな、話せば長く……って、おい！ 口より手を動かせ……そこ違うぞ」

「え？ え？」

「ここだ。…クリスマスまで時間がない。今日からいつでも何処でも絶え間無く、マフラーを編むんだ」

そう言った後、スノーマンはいきなり自分の体に片手をズボッと突っ込んだ。

「ガサ、ゴソ」

明はぎょっと目を丸くする。

「よつと…」

体から手を出すと、その手には赤い携帯電話が握りしめられていた。
「今からメアドを教えてやる。それで、わかんないところを聞け」と、スノーマンは穴の開いたお腹を撫でながら言った。

「…う…ん」

二人は、アドレスを交換しあった。雪だるまとアドレスを交換するなんて…。明は、登録し終えた携帯を見つめた。

それから一人の一人三脚の日々が始まった。スノーマンと初めて会つてから1週間が過ぎ、2週間目へと突入。…ついにクリスマス前日。

「やった！ 出来たよ！！スッチー」

明は、出来たマフラーをスノーマンに見せる。

「田は粗いけど、それだけできれば上出来だ」

スノーマンは腕を組み、ゆっくりとこくりと頷いた。

「あとは、先輩に渡すんだね。でも…貰ってくれるかな？」

「あいつに拒む理由はない」とスノーマンは、につこりと笑った。

そして、体に手を突つ込み、一枚のチケットを取出した。

「これでデートに誘え」

くしゃくしゃになつたチケットを差し出す。明は、それを黙つて受け取つた。チケットは、ひんやりと冷たかつた。

「デートに誘つてOKすればもう、願いが叶つたも同然だろ」

MISSION

マフラーを渡し、デートに誘え！！

「健闘を祈る……」

スノーマンはびしつと敬礼し、明もつられて、敬礼をした。

それは、それは互いに素晴らしい敬礼だったという…。

明は高鳴る心臓の鼓動をおさえながら、好きな人の家の前に立つていた。

スノーマンはこつそり影から、明を見守る。

「ピンポン」

インター ホンを鳴らす。

「はい」という返事とともに、玄関の扉が開かれる。

「あ、明ちゃん」

先輩は、にこつと笑顔を向けてくれた。明はその笑顔に失神しそうになつたが、ぐつと踏ん張り、言葉を口にしようとも、口を開く。

「あ、あ、あの…わ、私、マフラー…」
文章になつてない。今の明にとって、単語を並べるのがやつじだつた。

明はサッと、手編みのマフラーを渡す。

「僕に?うわあ、ありがと!」

先輩は、マフラーを受け取つてくれた。

「あの、先輩!私、私…」

冬なのに、暑い。汗もかいている。

「私、先輩のこと好きなんです！…もも、もしよければ一緒に『デート』してくれませんか？」

スノーマンは明が告白までするとは、予想外だつた。しかしこの時、グッと拳を握りしめていた。

「パッショントをぶつけたーっ！…男らしいぞ、明！！！」

明は言つてしまつたんだと、チケットを差し出している震える手を見つめる。

「…僕なんかでいいの？」

「へ？」

少しの沈黙が、明には長く感じられていた。駄目かと思つた。でも、今、何か嬉しい事を言われたような…。

「あの…『デート』してくれるんですか？」

「うん、こんな僕でいいんだつたら」

明は、ポカーンと口を開けた。願いが叶つてしまつた。

スノーマンが隠れていた方を向く。そこに、スノーマンの姿はなかつた。

「スノーマン…」

明は呟いた。願いが叶つたから、消えてしまったんだ。願いが叶つて嬉しいはずなのに、何だかちょっとびり寂しかつた。

…ありがとう、スノーマン。

「あれ？でも、それって、有効期限切れでない？」

先輩は、手に持つている明のチケットを見て言つた。

「えつ！？」

明は、急いで確認する。

「ああつ！…あーつ！…！」

歩いていたスノーマンは、野良犬と出会った。見つめ合つ二人（？）。野良犬は片足を上げた。スノーマンの雪の体に湯気があがる。「あつ！てめえ、引っ掛けるんじゃねえ！！溶けんだろ！！やめろ！！！」

垣沼明編・終

諒は、人気の少ない道を歩いていた。雪が少し積もつていて、靴に雪がついて足取りが重い。

諒は、冬が嫌いだった。寒いのは苦手だし、あの人が淋しそうな顔をするから。

「ちよいとそこのお兄さん」

諒の耳に、怪しげな声が聞こえた。諒は足を止め、辺りを見回してみた。

狭い路地の隙間に挟まるようにして、”それ”は居た。笑みを浮かべ、手招いている。だが、諒は見なかつた事にして、再び歩き出した。

スタスタ…。

後をつけられている。

「ちよいと、お兄さん。無視すんなつて」

何も聞こえない。諒は自分にそう言い聞かせ、足を速める。

スタタタタ…。スタタタタ…。

「待てよ…」

”それ”の口調が荒くなり始めた。諒は、走りだす。

スタタタタタ…。スタタタタタ…。

早い！何であんなモノがこんなに早いんだ。

「待てって言ってだろうがつ…！」

”それ”の腕がにゅうっと何メートルも伸び、「ガシッ…」と諒

の襟首を捕まえた。

襟首をしつかり捕まえた腕は、もとの位置に戻り始める。

「よひ」「ひみ

諒の田の前に、雪だるまの顔が現れた。

「…な、何の用？それって、着ぐるみだよなあ？」

諒は、真っ青な顔をして雪だるまを見ていた。

「だったら、腕が伸びると思うか？」と、雪だるまは表情を変えず
に言った。

諒は雪だるまの手から逃れようと、もがいた。その時、肘が雪だる
まの顔に当たった。

「ボトッ」

雪だるまの頭が取れた。諒は頭を拾い上げ、体に乗せた。そして、
その場から何事もなかつたかのように去りうとした。

「おい！ちょっと待てこらあつ……人の首落とし」と、謝んねえ
のかい！…しかも、ズレてんだよ……」と、雪だるまは頭を押さえ、
もとの位置に調節する。

「い、いや、悪いな」と、諒は顔をひきつらせながら、笑った。

「まつたく…」と雪だるまは不機嫌そうにしていたが、気持ちを切
り換え、

「オレは、スノーマンだ！！お前の願い事を叶えてやるぞ」と機
嫌よく親指立てて、グーのサインを作った。

「……」

諒はくるりと向きを変え、歩く。諒は伸びたスノーマンの腕によつ
て、再び捕らえられた。

「叶えてやるつて言つてんだから、ラッキーだと思えよ」と、スノ
ーマンは諒を睨みつける。

「い、いや、いいよ」と諒は断るが、

「で、どんな願いを叶えてほしい？ラッキーボーイ」と、スノーマ
ンはお構いなしに話しを進める。

「はあ…。願い？願いねえ…」

諒は溜め息をついた。どうやら、抵抗する事を諦めたようだ。
諒は、遠い目をする。

その人の事が頭に浮かぶ。
その人の笑顔が見たい。

本当の笑顔が。

「…願いつてのは、どんなものまで叶えられるんだ？」

「たいていの事なら、叶えられるぞ」

「俺、大切な人の笑顔が見たい。しばらく、見てないんだ。その人が見せるのは、俺を気遣った笑いだけ」

「ふうーん、何か訳ありみたいだな。じゃあ、そいつの処に案内しろ」

「え！？あんたを会わせるのか？！」と諒は、露骨に嫌そうな顔をした。

「当たり前だろ。どうしたら、笑顔が見れるか対策を練らなくちゃだろ？その為には、本人を見とかなくきやだろ」

「どんな理屈だよそれ。俺、あんたと町中歩きたくないんだけど」「は！？お前こそ、何なんだよ！オレは、可哀相な嫌われ者か？！？
そうなのか？こんな可愛らしい姿なのにい？」と、スノーマンの顔が迫る。

「…わ、わかつた。案内するよ」

行き交う人々が、振り返る。諒は、ちらりと隣を見た。スノーマンが、テクテクと歩いている。

「俺、本当にラッキーボーイ？」と諒は苦笑いをして、呟いた。
しばらく歩くと、白い大きな建物に出くわした。

「総合病院?」と、スノーマンは門に取り付けられた看板のプレートを見る。

「行くぞ」

諒は立ち止まっているスノーマンに、中庭から声をかけた。スノーマンは、急いでスタスターと諒に駆け寄った。

中に入ると、待ち合い室はがらんとしていた。たまに行き交う看護師と医師の靴音だけが、病院内に響いていた。

「205号室だよ」と諒はスノーマンに言い、階段を上り、病室へ向かった。

「藍田加代子?」

スノーマンは、205号室の名前を見た。

「俺の母さんだ」と諒は言い、病室のドアを開けた。

「あら、諒ちゃん

諒の母親は、弱々しく笑う。

「どう? 具合は?」と、諒は母親の側に寄る。

「ええ、いつも通り。変わりなしよ」

「そう」

変わりなしつて事は、良くはないってない。

「あら? 今日は、可愛らしいお連れがいるのね」

「あ…どうも、スノーマンです」

スノーマンは、ぺこりと頭を下げる。何故か、元気がない。

「はじめまして。諒の母です」と、諒の母は丁寧に頭を下げる。

「諒と仲良くしてくれてありがとう。この子、無愛想だから、友達があまりいないの」と、母親は諒を見る。

「いえ、いえ、諒さんは僕のわがままにお付き合って頂き…」

スノーマンは、ぺこり、ぺこりと頭を下げる。

諒はふと、ある事に気がついた。

「母さん、今日は顔を見に来ただけなんだ。こいつを無理矢理付き合わせちゃったから、そろそろ行くな。何か、来たばっかりなのにごめん」と、諒はすまなそうに笑つた。

卷二

「じゃあ、いえ、いえ、なんの、なんの」

二

謎はスノーマンの手を引いて張りながら、急いで病院から出た。「な、何だよ！ そんなにオレを母親に会わせたくないのか？！」と、引きずりれるようにして出て来たスノーマンは、顔を歪める。

「違う。自分の体を見ろ！」

目録を
見

「と、溶けてるーつ！..！」

スノーマンは急いで雪が寄せ集めてあつた所へ駆け、せつせと雪を体に塗りたくつた。

「病院は 暖かくしてあるからな」と 読はスノーマンの必死な様子を見つめながら言う。

死ぬ!! おれ死んじゃ!!

スノーマンは半ベソをかきながら、雪を塗りたくり続ける。

つくる

「いいんだよ、その方が一溶けにくくなつたんの!! オレは、死にたくないのぉー!!」

卷之三

「ああ」と、あの人のかわいい笑顔を見たいんだな

「じゃあ、あの人的好きなものって何なんだ?」「好きなもの…」

諒は、病院の中庭にある木を見た。

「桜だよ」

「桜?」と、スノーマンも木に目をやる。

「季節じゃねえな」と、スノーマンは呟く。

「母さんは、2回目の春にはもたないだらうつて、医者に言われてんだ。来年がその2回目。だから、悲しそうな顔をしていつも冬空を眺めている。冬は、嫌いだよ」と、諒は笑った。

「冬が来なきや、春は来ないぞ」

スノーマンは、真面目な顔をして言った。

「まあ、オレに任せとけ。桜もいいが、冬の花を見せてやるよ」「冬の花?」

「…で、何で俺達スーパー来てんの?」

諒は訳がわからず、何かを探すスノーマンの後ろ姿を見ている事だけしか出来なかつた。

「ん?ああ…」

スノーマンは、諒の話を聞いてはいなによつて、適当に相槌を打つ。

「…お前、人の話を聞けよ」

「ああ、うん」

「…聞いてないな」

「うん」

諒は「ボカッ」と、スノーマンの頭を一発殴つた。

「何すんだてめえ!」

スノーマンは諒を睨みつけ、殴られた頭をおさえる。

「ん?あーっ!!頭、へこんでんじゃんかよ…!」

スノーマンはへこんだ部分を撫でて、修復する。

「オレが何をしたってんだよー」と、スノーマンは半べソをかく。諒はそんなスノーマンを見て、罪悪感が芽生えた。

「い、ごめん、つい…」

「ついとかうつかりで、済まされない事もあんただぞ!」

スノーマンは号泣しながら、諒に詰め寄る。

「わ、悪かったって。本当にごめんな
「オレの何処が嫌いなんだ！？」オレは、可愛い雪だるまちやんだぞ
！」

「嫌いじゃないよ…マジで…いや、本当に」
「…おつ！こんな所にお出でての物が」とスノーマンは、諒の後ろにあつた探し物を見つけた。この時諒は、スノーマンにもう一発入れたいと思った。

諒とスノーマンが出会った今日は、クリスマスだった。

諒はスーパーを出た後、スノーマンと別れて母親の為に淡い桃色のショールを買つた。桜の色に似ている。きっと喜んでくれるだろうと、病院へ向かった。

「母さん、クリスマスプレゼント」と、諒は母親にさつき買つたショールを渡した。

「ありがとう。まあ、綺麗な色。私は、あなたに何も用意していいないわ。ごめんなさいね」と、母親はすまなそうに俯く。

「いいよ。俺へのクリスマスプレゼントは、母さんが元気になる事。いい？」と諒は、笑つた。

「そうそう、クリスマスプレゼントと言えばスノーマンからもあるらしいんだ」

「あの可愛らしいお友達？」
「外が暗くなつてから、窓を見てほしいんだつて」

「何かしら？」

「さあ？俺にもわからないよ」

「うつしゃあつ！いい具合に空が暗くなってきたな。登るべ！」

スノーマンは風呂敷包みを袈裟懸けにし、病院の中庭の木を見上げた。そして、まるで猿のようにすこすこ登つてていく。

調度いい太さの枝に立ち、諒の母親の病室の窓を探した。

「もうそろそろかな？」

諒は陽の光が入らなくなつた部屋を見て、窓に近寄つた。

窓からちょうど中庭の木が見える。そこに、白いモノが見えた。

「母さん、じめん。寒いだらうけど、窓開けるね」と、諒はベッドの上の母親に振り向く。

「お友達が何か見せてくれるんでしょ？駄目なんて言わないわよ」と母親は、優しく応えた。

窓を開ける。冷たい風が部屋の中を通り抜けていく。諒は、スノーマンに手を振つた。

「おおーあそこだな」

スノーマンも大きく手を振つて、応える。

風呂敷包みを紐解くと、中から2本の赤い液体が入つた瓶が出てきた。瓶に貼つてあるラベルには、イチゴシロップと書かれていた。1本ずつ両手に持つと、イチゴシロップを口に含んだ。

「ブーッ！！」

木に振り掛けるよつて、口から吹き出す。

「母さん、見てみなよ。桜だよ！」

諒は嬉しそうに、母親の方を向く。母親は不思議そうに、ベットから出て窓の側へと近寄る。

木は、真っ黒な空をバックにキラキラとピンク色に輝いている。

「綺麗…」

母親の眼は、無邪気な子供のようにキラキラと輝いていた。その口元は自然に緩み、笑みが零れ落ちる。

風がふわっと流れ、木にキラキラと降り注ぐものを運んできた。

母親は、窓から手を伸ばしそれを受け取る。

「冷たい…。これ、雪だわ」と、母親は少し驚いたようじ、手の上で色付けされた雪が溶けるのをじつと見ていた。

「冬の花か…。雪だるまのあいつにしか出来ない事だな」と、諒は笑つた。

「あら、諒ちゃんのそんな笑顔を見るの久しぶりだわ」

母親は諒の顔を見て、笑つた。本当に笑顔を無くしていたのは、諒だつた。

諒は、木に目を戻す。すると、木の下に人々が集まっているのが見えた。みんな、木に降り注ぐピンクの雪を不思議そうに眺めている。

「はあ、はあ、はあ、そろそろ疲れてきたぞ。オレ、何かスマートになつてきてるし。あんまし、スマートな雪だるまなんて可愛くないじやん」

スノーマンは、息を切らせていた。

「あーっ、あれって、雪だるまあ？」

下を見下ろすと、小さな男の子が自分を指差している。

「え？ 嘘」

「本当だ。そうだよ。雪だるまだよ」

「誰があんな所に？」

「何か動いてない？」

人だからがいつの間にか出来ていい。どうやら、潮時のようにだ。ちようど、瓶の中味も空になつた。

「おーい！ そのお前ら、オレを受け止める」

人々は雪だるまがしゃべった事に驚いてざわざわとしていたが、スノーマンはそんな事を気にする様子もなかつた。

「今から飛び降りんぞ！ ちゃんと受け止めてくんねえと、オレ粉々

になつからな！！お前らみんな人殺しになんぞー」と、スノーマンは合図もなしに木から飛び降りる。人々はとっさに、手を広げた。

「ドサツ！！」

何人かは、スノーマンの下敷きになつた。

「ふうー、ナイスだぜお前ら」

スノーマンは人を下敷きにしたまま、汗を拭う。そしてすぐつと立ち上がると、人込みから出た。くるつと人々の方へ振り向くと、「メリークリスマス！！」と笑つて、駆け足でその場から去つて行った。

人々は何が起きたのかわからず、寒い事も忘れ、しばらくその場に立ち尽くしていた。

「今日は、クリスマスね。去年の事を思い出すわ。スノーマン君が私たちに雪の桜を見せてくれたのよね」と、諒の母親はふふつと笑う。

「あの後、奇跡が起こったように母さん以外の人達も急に病気が回復の方に向かつたんだよな。まさか、今年の春が迎えられてそのうえ、一時退院まで許されちゃつたもんな」

諒は嬉しそうに、スノーマンの顔を思い浮かべながら笑う。

「でもあれ、桜の木じゃなかつたのよ」

「え？」

諒は、きょとんとする。

「桜の木はその隣。今年の桜見たくせに気付かなかつたの？」

「そういえば……」

俺が教えたのに……ちゃんと人の話し聞いてなかつたな。

前の日に雨が降り、雪が溶けて寒さで凍結した道をスノーマンは歩いていた。

「オレはスノーマン 可愛いキャラクター みんなのアイドルさー
ー

藍田諒編 • 終

い。ここは、日本にある普通の家。だが、住んでいる人は普通ではな

今日はケリヌマヌの朝。何せ「」の家が騒々しい。

「まあ!? 河でオレ、トカカイなんだよー!!

雪太は、着ぐるみを頭からすつぽり被り、怒鳴っている。だから、迫力には欠ける。

「バカヤローーっ！」の「」時世、不景気で金がなくて、トナカイが雇えねえんだよ！！」

だ。

「あんたの稼ぎが悪いだけだろ！－つてか、オレが何であんたの手

伝いしなきやなんねえんだ?!

「勝手に決めんじゃねえ！！！オレは継がねえよ！！！」

「何だと！？てめえ、何が不満なんだ！」

サンタかしなぐたつてなあ。今時の方ギは新かひアレセン上賣ひ

「馬鹿言えー！サンタは、櫻を『えんだよ。それ』の金色の粉を子

供らに振り撒いて、来年も幸せな年が送れるようじてやるんだ」

「それで、どうもつけてござる。」

かも、ここ日本だし」と雪太が、鼻で笑うと父親は後ろに積んであるガラクタの山からフラフープを出した。

「大丈夫だ。タラララッタンツターン 通り抜けフープ」

「ドラ○もんのパクリかよ！！」

「それに夢を与えるつてえなあ、そんなんであんた、よく言えるよ」

雪太は、トナカイの手で父親を指す。

「俺の何がいけねえんだ？」と、父親は自分の体を見る。

「普通、サンタつてのは『デブ』の人の良さそうな外人のおっさんだろ！？なのにあんた悪人面で、引き締まつた体。しかも、一見すると堅気な職人みてえな純和風テイスト。笑っちゃうね」

「サンタ協会に公認されりやあ、誰だつてサンタになれんだよ。それに顔がこんなんでも、俺の中は夢いっぱいだ！！」

父親は、胸を張つて言う。

「よくもそんな恥ずかしい事を平氣で言えるよ」と、雪太は呆れていた。

「とにかく、あんたに夢があるつとなからうとオレは、サンタを継ぐ気はないし、サンタ業を手伝つつもりもないから。せいぜい、ガキ共に夢とやらを与えてくれ」

雪太はそう言うと、自分の部屋へと行つてしまつた。

「あのガキヤア、親を馬鹿にしやがて！！聖なる日に生まれた人間のくせに、人に夢と幸せを与えるつて事がどんなに大切かわかつちやいねえ。思い知らせてやらなきやな」と父親は、ニヤリと笑つた。

次の日一。

「ギヤアーッ！！！」

雪太の悲鳴が家中に響き渡る。

「何じゃこりやあーー！」

雪太は、自分の体を鏡に映す。そこに居るのは、丸い白い体の間抜け面。

「フフフ…どうだ雪太」

いつの間にか、煙草をくわえた父親が後ろに立っていた。

「親父！？あんたの仕業か！！」

雪太は、真ん丸になつた黒い目玉で父親を睨みつける。

「サンタは何でも出来るんだ。俺からのクリスマスプレゼントだぞ。スノーボーイ」

父親は、意地悪そうに笑みを浮かべる。

「もとに戻せ！このクソ親父！！」

雪太は、まだ不慣れな体で父親に詰め寄る。

「10人の願い事を叶える事ができればもとの姿に戻るぞ」

「じゅ、10人だとー？」

雪太は丸い目玉をさらに丸くする。

「戻りたきやあ、行つて來い。あんまり文句垂れてつと、この穏和な俺も我慢ならなくなるぜ」と父親は笑顔で言つと、何処からかライフル銃を出し、雪太の丸い頭に突き付ける。

「風穴開けるぞ」

「……行きます」

「ジングルベル ジングルベル 鈴がなるー」

スノーマンは独り、公園のベンチに腰掛けっていた。

「はあ…。あと1人だつてえのに、なかなかチャンスねえなあ。こんな可愛いオレなのに、みんな逃げちまうんだもん。グッスン」
スノーマンがしおげていると、

「ニヤー」と、猫の泣き声が聞こえた。

「ん？」

スノーマンが顔を上げると、田の前に一匹の三毛猫が居た。
「何だお前？ オレを慰めてくれんのか？」

「ニヤー」

猫は、スノーマンの言葉がわかつているかのように、もう一鳴きした。

「いい奴だなあ」とスノーマンは言ひ、「自分の体に手を突っ込み、パッケージに入った煮干しを取出した。猫は驚いて、ビックとしていたが、

「ほりやるよ」とスノーマンに煮干しを差し出され、近づいた。クンクンとにおいを嗅ぐ。一噛りしてみる。少しカチカチに凍っているが、噛むと味が滲み出てきておいしい。ガジガジと噛み始めて、煮干しを頬張る。

「あーっ！ 雪だるまー！」

突然大きな声がし、猫とスノーマンはピクシとなる。

「ホントだあ」

子供が3人、スノーマンの方へ駆け寄る。

「わあーっ！ すげえーっ！ 雪だるまが動いてるー！」

子供たちはスノーマンを見て、目を輝かせる。

「わっ！ お前ら何処触つてんだー！ やめろ、いじるなー！ 形が崩れんだろ」

スノーマンは、子供たちに揉みくちゃにされた。子供の一人がじつ

と、赤い長靴を見つめた後、片方を引っ張がすた。

「うわっ！ 何すんだー！ やめろーー！」

「ズドーン」

スノーマンの叫び声と共にその体はバランスを失い、地面に倒れる。

スノーマンは、ジタバタと残った片方の足と両手をばたつかせる。

「こっちも取つてやろうぜ」

子供は恐ろしい…。無邪氣だからこそ。

「足がなーい！…歩けないーっ！…」
子供たちが去つた後、スノーマンは泣きながら叫ぶ。声は虚しく空に吸い込まれる。

「ニヤーー」

猫は心配そうに、スノーマンの顔を覗いた。

「ああ、オレって惨め…。この姿で何回、クリスマス過ごしてんだろ。あの時が17だったから…」

スノーマンは手袋の指を折り、数える。

「4回？今年で5回目かよ。高校に行かずに、20過ぎてもう、22になんのかよ。ありえねえー」

スノーマンは悲しくなり、泣き始めた。そこへ、

「雪だるまさん、どうしたの？」と、一いつ髪を結わえた可愛らしい女の子が声をかけてきた。

「靴を奪われ、自分の呪われた運命に嘆いているんだよ、嬢ちゃん」とスノーマンは、泣きながら答える。女の子はスノーマンの足元を見ると、

「ちょっと待つて」と言い、その場から去つて行つてしまつた。

数分が経つた。

「…まだかなあ？」

スノーマンは、灰色の空を見上げる。雪が降り始めるなと思つていると、小さな足音が聞こえてきた。

「お待たせ。雪だるまさん」

女の子は、につこりと笑つた。その手には、一足の雪用の真っ白な長靴が抱えられていた。

「これ、あげる。私ね、ずっと前、寒ーい処に居たんだけど、ここ

に引越したの。ここはそこよりあんまり雪が積もんないから、これ
いらないの。私の大きいお兄ちゃんの方の靴だからおつきいけど、
雪だるまさん履いてくれる?」

世の中にはこんなにしつかりしてて、いい子もいたんだなあとス
ノーマンは、女の子を見ながら思つた。
「ありがとな。悪いけど、その長靴をオレの足元の方に、挿してく
んねえか?」

「いいよ」

女の子はぐいっと、長靴を雪の体に押し込む。

「ついでに手も貸してくれ」とスノーマンは言い、女の子はスノー
マンの手を取り、少しの力を貸した。

「ありがとう。お前には、幸福が訪れるぞ」

スノーマンは、優しく女の子の頭を撫でた。女の子はこいつと、
微笑む。

「ニヤー」

猫が一鳴きした。

「お前、まだ居たのか」とスノーマンは、猫を見る。

「可愛い」

女の子は、猫を撫でた。

「あれ?」

女の子は、猫の赤い色の首輪にぶら下がつてて、プラスチックで
きた円い物を見た。

「何か書いてあるよ。///...。あとは読めないや」

スノーマンはどれどれと、首輪を見る。

「三丁目...。これ、住所だな。こいつ、迷子かも」

「かわいそう」と女の子は、猫を抱き抱える。

「ここからあんまし遠くないみたいだから、オレが家まで連れて行
つてやるよ」

「ニヤー」と猫は、嬉しそうに鳴いた。

スノーマンは、倒れた時に落とした水色のバケツを拾つと、巻いていた黄色いマフラーをその中に入れた。

「ミミをこの中に入れてくれねえか？オレが抱いたら、こいつ凍え死んじまうからな」

女の子は、猫をバケツにそつと入れた。

「ジングルベル ジングルベル 鈴が鳴る——」
少し歩いた先に、猫のミミの家はあつた。

「ピンポーン」

インターホンを鳴らす。

「……」

誰も出て来ない。

「ピンポーン」

もう一度、鳴らす。

「……」

スノーマンは首はないので、頭を傾ける。

「ニヤ？」

ミミも首を傾げる。

「あら、雪だるまさん。何か御用？」と、隣の家から40代くらいの女人が出て来た。

スノーマンを見て、驚く様子はない。どうやら、着ぐるみを着ていると思つてゐるらしい。

「このミミって猫を届けに来たんですけど」と、スノーマンはバケツに入ったミミを見せる。

「あらあ。可哀相ねえ、そこの人なら、引越してしまったわよ

「引越し先、聞いてませんか？」

女の人はスノーマンに言われ、少し考えた後、腰に巻いていたエプロンのポケットから一枚の紙切れを取出した。

「これ、引越し先のメモよ。もう書き写してあるから、あなたにあげるわ」と、スノーマンは紙切れを貰い礼を言つと、テクテクと歩いて行つた。女の人はその後ろ姿を見送つていたが、「あらあ」と声を上げた。

スノーマンの丸みを帯びていた背中は、何処かに倒れたかでもしたようになつて平らになつっていた。

「この場所に行くには、電車に乗らなきゃだな」
スノーマンは、紙切れを見ながら呟いた。

「ニヤー」

「安心しろ。責任持つて、チャーンと家に届けてやるよ」
駅に着くと、体から赤いガマグチを出した。そこからお金を出し、切符を買つと、マフラーの中にマリマリを隠して電車に乗つた。

ガタン、ガターン

1駅。

ガタン、ガターン

2駅。

「悪い、ミミ。限界だ」

周りの人々は、スノーマンを避けながら、目を丸くして見ている。
スノーマンの体からは、雫がポタポタと流れ落ち、足元には水溜まりが出来ていて、次の駅に着くと、ドアが開く前に駆けて飛び出そうとした。

だが、あまりにも慌て過ぎたのが悪かった。ドアが開けきつていなかつた為、頭がドアにぶつかって、頭が少し変形した。それでも構わず、外に出た。

「頭が体が一つ！！」

スノーマンは、駅の外に前の雪が残つて積み上げられていた場所へと飛び込む。その上に体をゴロゴロと転がす。体がもとに戻つたところで立ち上がり、ある事に気がつく。

「目が！目が片方ない！！」

地面にはいくくばつて探すが、見当たらない。

「雪だるまさん、どうしたの？」

男の子が声をかけてきた。

スノーマンはショックと焦りの為、言葉を口にする事が出来ない。泣きながら、ふるふると首を横に振る。

「元気だして」

男の子は、アーモンドチョコレートを雪だるまにあげ、去つて行った。

今日は、何だか自分が余計に惨めに感じる。貰ったアーモンドチョコレートをじっと見つめた。
もしかしたら……。と、アーモンドチョコレートを無くなつた田の場所に押し込む。

「見える……」

今さらながら、自分の体は何でもありだと悟つた。

「一やーー」

「悪いな。電車の中は、暖房がきいててムリなんだ。時間がかかるけど、歩いて行くぞ」と、スノーマンは猫に言つ。

じばら歩いた。もう、辺りも暗い。雪が降り始めていた。

「大降りになんな」と、スノーマンは段々と大きくなる雪の粒を見ながら、呟いた。

周りの家々には、暖かい明かりが点つてゐる。スノーマンは、淋しそうな眼でそれを見つめた。

「ウニーやーー」

猫はそんなスノーマンを察したのか、自分がここにいることを鶴いたように聞こえた。

「煮干しまだあるが。くれてやる」と、スノーマンはバケツの中に残りの煮干しを入れた。

「早く家に届けてやるからな」

スノーマンは真面目な顔をして、わざとよりも足を速めた。

朝が明けるのは、早く感じた。猫はマフラーの中に潜り、丸まつて眠っていた。スノーマンは眼氣を抑え、歩き続けた。

多分この調子だと、着くには日が落ちている頃だらう。そんな事をぼーっとした頭で考えていると、ふと、ある事を思い出した。

今日は、12月24日。自分の誕生日だ。

「とうとう、22になっちゃったよ」と、苦笑いした。あの父親のせいで、5回目のクリスマス。

いつになつたら、もとに戻れるのだろう…ずっと、この体のままなのか？

冬にはいつもやつて歩き廻れるが、夏は冷凍庫の中で夏眠状態。この体に慣れてしまった。そう感じる自分が恐ろしい。

今まで願いを叶えた9人の顔を思い出す。…あれ？でも、そんなに悪い事ばっかりじゃなかつたかも…。

「ここだな」やつと目的の場所に着いた。空は予想通り、暗くなつていた。紙切れを見て、確認する。間違いない。

「ピンポーン」

インター ホンを鳴らした。

「はーい」

中から女の子の声がし、扉が開かれる。小学6年生くらいの女の子が出て來た。

「ニヤーッ！」

「///は嬉しそうに、バケツから飛び降り、女の子のもとへ駆ける。

女の子はしゃがみ込み、手を広げ///を受け止めた。

「会いたかったよ」と、女の子は///のふわふわな毛に頬を擦り寄せる。スノーマンは、その光景に自分の口元が緩んでいる事に気がつかなかつた。

女の子は「ミミ」を抱いたまま立ち上がり、スノーマンに向かつて微笑んだ。

「ありがとう。白髪の天使さん」

スノーマンはこの時、自分の胸が暖かくなるのを感じた。幸せを与えるのも悪くないなど、ちょっとぴり思つた。そして、笑顔になつた。

「メリークリスマス」

「あー、見てママ！…真っ白な人だ！教会にいる天使さんみたいだよお」

スノーマンは、親子連れとすれ違つた。何を指しているのだ？と、振り返る。

「本当ね」と母親は、にっこりと笑つてゐる。だが、辺りにはその親子と自分しかいない。しかも、自分の方を見ているような…。スノーマンは、近くの家の窓に自分の姿を映した。

何故だか生まれた時から真っ白な髪、母親譲りの青い瞳、男の割りには、白い肌。真っ白な洋服を着た男が目の前に映つてゐた。

「オレ…もとに戻つてる…？」

何でもとに戻つてゐるとかそんなの気にならなかつた。ただ、嬉しかつた。

「やつたーー！」

ガツツポーズをし、思わず星が煌めく空に向かつて叫んだ。

「バカヤロー！近所迷惑だーー！」

「あ…す、すいません…」

もしかしたら、サンタと一緒に白髪の天使があなたのもとへ幸福の金色の粉を振り撒きにやって来るかもしません。皆さんに幸福が訪れますように。

『Merry Christmas!!!』

冬風雪太編・終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3964d/>

Xmasの贈り物

2010年11月29日09時12分発行